

『浪速詰方日記』 芸能関係記事の考察

中川 桂

はじめに

江戸時代、福岡藩の大坂蔵屋敷が中之島にあったが、国元から来坂して勤務にあたった武士の日記『浪速詰方日記』（以下、本稿では詰方日記と表記）が大坂商業大学商業史博物館に所蔵されている。伝わるのは「初度目」「二度目」「四度目」と題された三冊なので、三度目の来坂時の記録は失われたものらしい。これらはすでに、商業史博物館の史料叢書第三巻「蔵屋敷Ⅲ」に翻刻が収録されている。また、小田忠氏が『浪速詰方日記』を読む―大坂蔵屋敷に勤務する武士たち―として『大阪商業大学商業史博物館紀要』第三号に、日記が記された時代の動向等も含めて詳しい論考を著されている。筆者が、この

日記に多数の芸能関連記事が含まれているのを知ったのも小田氏の論考によってであり、その成果に拠るところは大である。その一方で、氏の論考はその時代を総体として捉えようとしたものであるため、個別の記事内容については今後詳しく見ていくことができそうである。筆者は専門分野である芸能関係の記事に的を絞り、それらを芸能ジャンル別に考察することにした。なお、本稿は詰方日記に記された芸能興行を考察しようとするものであり、この時期の大坂における芸能興行の総体を把握しようとするものではない。

まず、この詰方日記の基本的な性格と、記載時期について触れておく。

この日記の筆者は、福岡藩勘定奉行の大岡克俊であることが明記されており、小田氏の前掲論文にも記されているところである。

残された日記三冊の期間は、それぞれ以下の通りである。福岡を発つところから記載が始まるが、大坂への到着、また大坂を離れる月日についても示した。

【初度目】天保十一年（一八四〇）二月～同十二年（一八四一）四月
三月十七日着坂 四月二十二日離坂

【二度目】嘉永三年（一八五〇）一月～同四年（一八五一）三月
二月十二日着坂 三月二十四日離坂

【四度目】文久元年（一八六一）七月～同二年（一八六二）七月
十月十一日着坂 七月七日離坂

記事内容は主に経済活動に関する職務であるが、出入りの商人ら大坂の町人との付き合いも数多くあったことがうかがえ、主に蔵屋敷に關係する有力商人を通じて、芸能とのかかわりが見られる。

なお、詰方日記の引用は基本的に前掲史料叢書の翻刻によったが、疑問がある箇所など部分的に商業史博物館所蔵の原本を確認した。

一 能楽

日記から確認される芸能関係記事の中では、能楽（能・狂言）にかかわるものが圧倒的に多い。これはいうまでもなく、江戸時代には能が幕府の式楽であり、武士身分である大岡克俊にとっても能とのかかわりが最も強かったことの表れである。これまでに筆者は、上層町人である惣年寄が能と深いかかわりを有していた具体例を紹介してい

る。^{〔1〕}また、天満天神（現・大阪天満宮）の神主である滋岡家も能と強いつながりがあり、滋岡家の十二代目となる功長父子が大倉宣義から鼓を教わっていたことは、大谷節子氏の「能役者の雅交―大倉宣義と大坂天満宮神主滋岡家をめぐって―」（『芸能史研究』一四九号）で紹介されている。武士身分の福岡藩士は、それらよりもさらに強い関係を有していた様子が、この詰方日記からうかがえる。

能関係の記事は多数に上るので、それらを逐一検討することは避けられる。総体については別表をご参照いただきたい。

ひとくちに能とのかかわりといっても、時代により多少の特徴の違いもあり、また能の鑑賞と、素養としての謡でも性質が異なるので、ここではいくつかの特質ごとに考察する。

（一）天保十一、十二年の能見物

天保十一年（一八四〇）四月十一日の詰方日記には次の記事がある。

一、十一日 曇後雨 榎村常舞台二而能興行、見物罷越。廣田同道。番組別紙在。夜河佐行。南部初跡より来候。

これは榎村常舞台での能興行を見物したとの記事で、文中には「番組別紙在」とあるが、それは確認できない。大坂では幾つかの常舞台が公儀から認められていた。榎村の舞台は元来は堀江新地に認められた常舞台の権利を、文政十一年（一八二八）にこの地に移すことが認められ、主に江戸末期の能興行に使用された、西天満にあった能舞台

表 『浪速詰方日記』の能関係記事一覧

年月日	場所	内容
天保11.4.11	榎村常舞台	能興行見物
4.22	榎村常舞台	翁 加茂 熊野 谷行 善知鳥 是界 二人大名 引くゝり 靱猿 宗論
8.22	堂嶋・池卯宅	講(謡力)講、聞きに行く
10.16	榎村常舞台	能興行、昼後暫時見物 定家 国栖 児流鎬馬
12.1.29	御長屋	謡講催す
2.2	御長家	謡講催す
4.21	榎村常舞台	能興行、昼後より見物
嘉永3.2.26	船町 小松原伝四郎宅	能興行見物 翁 白髭 俊成忠則 小原御幸 鉢木牛馬 悪太郎 連歌十徳 金津地蔵 白髭の間勸進聖
2.27	小松原宅	能見物 田村 井筒...段ノ序 大会 海土...変生男子 熊坂 □平 嚙吐 御茶ノ水 うつほ猿
3.24	榎村常舞台	能興行 絵馬 関原与一 花がたみ一舞入 道成寺 船弁慶 語船唄 靱猿 武悪 簸屑 木六駄
4.12	榎村常舞台	能興行 小督 二人静 乱 正尊 是界 粟田口 素ほう落 瓜ぬす人 鈍太郎
5.7	小松原伝四郎宅	稽古能、昼後見物 歌占 江口 唐船 長良 黒塚 鬼丸 鷹磔 二人袴 瘦松
5.8	小松原能見物	放下僧 柏崎 芦刈 融 竜虎 口まねむこ 縄ない 十□ 千切木
5.26	拙者御長家	謡講 加茂 井筒 安宅 独吟・卒塔婆小町 邯鄲 一調・弱法師 夜討曾我 鶴ノ段 白楽天
8.20	小松原宅	能興行 広岡棧敷で20・21両日とも見物 枕慈童 俊寛 小鍛冶 百万 夜討曾我 膏薬練 不見不聞 腥物 雷
8.21	小松原宅	能興行 鶴飼 羽衣 山姥 高野物狂 昭君 巴 一調・梅枝 松山鏡 語鱸包丁 烏頭 殺生石 鶏流 蟹山伏 悪坊 武悪
11.11	小松原宅	能興行、広岡棧敷へ 玉井 飛鳥川 小袖曾我 国栖 船弁慶 塗附 入間川 柿山伏 文荷
11.12	小松原宅	能興行 通盛 熊野 邯鄲 歌占 野守 二千石 井杭 惣八 狐塚
4.2.2	御長家	謡講 鶴亀 熊野 弱法師 狸々 一調・松風 笠之段 放下僧 景清 八嶋 松虫
2.18	小松原宅	能興行、廣岡棧敷で見物 翁 養老 松風 葵上 昭君 大仏供養 鷄むこ 飛越 連歌盗人 棒しばり
2.19	小松原宅	能見物 春栄 花筐 是界 藤戸 烏帽子折 竹生嶋参 清水座頭 千鳥 鏡男
文久元.12.8	壱番長屋	謡講 難波 橋弁慶 羽衣 俊寛 安達原 養老 項羽 船弁慶 ほか仕舞・一調など
2.2.3	(不明)	鈴木藤次郎能興行につき、祝儀金百疋贈る。見物には行かず
2.27	榎村常舞台	脇師浅野清左衛門先代追善能見物 祝儀金百疋遣わす。同道の向きよりも一封遣わす 蟻通 熊野 望月 羅生門 春栄 融 昆布売 真奪 伊文字 簸屑
6.7	(不明)	謡講 弱法師 草子洗 藤戸 鞍馬天狗 祝言 仕舞・蝉丸 烏頭 独吟・小袖曾我 加茂 日本記 淡路 七騎落

である（拙稿「近世後期大坂の能常舞台」〔『芸能史研究』一三一号〕参照）。

この日の演能については、ちょうど惣年寄の永瀬幾代介が書き留めた一連の記録（大阪商業大学商業史博物館蔵）のうち、天保十一年の『公私日録』に記事があるので以下に引用する。

一、於榎村常舞台、桜川金作興行稽古能有之、兩人共罷越。

三次郎 権兵衛

鉄輪 松風 檀風 金作 融 雨天二付後チシテ斗。

三次郎

船弁慶 語 延引

こちらの記述内容から、詰方日記の催しは桜川金作による稽古能であったことや、またその日の曲目が明らかになる。詰方日記にも「曇後雨」と記されていたが、途中から天気が崩れて『融』は後場のみが行われ、また『船弁慶』の語りは延引となったことが知られる。

同年四月二十二日の詰方日記にも「於榎村常舞台能興行有之」とあり、以下のように番組が控えられている。

能組

翁 加茂 熊野 谷行 善知鳥 是界

二人大名 引くゝり 韮猿 宗論

『翁』以下、『是界』までが能、『二人大名』から『宗論』までが狂言の曲名である。実際の上演ではまず儀式的な『翁』が演じられた後、能の次に狂言、という順序で演じられるので、この日は『加茂』の次に『二人大名』、その次が『熊野』…という順序で演じられたと

考えられる。なお、この二十二日も永瀬幾代介が見物に出かけたことが『公私日録』の記述から分かるが、大岡の詰方日記と較べると『翁』が記されていないものの、後は同じ曲名が控えられている。永瀬の日録からは、この催しについても「稽古能」であったことが分かる。

同年十月十六日の詰方日記には以下の記事がある。

於榎村能興行有之、鴻池永七郎・彦市シ申遣し參。昼後暫時見物

罷越。定家 国栖 児流 鎗馬 前後八見物不致。

昼から暫時見物したということなので、催し全体の中盤のみ見物したということであろう。この日の演能についても永瀬の日録に、以下の記載がある。

一、大蔵流狂言師素人藤田彦四郎事改名、三十郎義、此度黒人二相成候付、今日為右弘稽古能有之候。

黒人は玄人の意であるが、この日の能興行は、藤田三十郎の披露目のための稽古能であったことがここから知られる。これらのほか、詰方日記には翌天保十二年四月二十一日にも榎村の能興行を昼から見物したとの記事があるが、天保年間に見られる見物物はすべて天満榎村においてのものである。

(二) 嘉永から文久年間の見物

嘉永三年（一八五〇）から四年にかけての、二度目の詰方日記には、能関係の記事が多数見られる。その上、この時期の能記事には目

立った特徴が認められる。それは小松原伝四郎との交流である。

さきに小松原伝四郎につき、簡単に触れておきたい。宮本圭造氏「紀州藩お抱え能役者の動向―和歌山県立文書館所蔵御役者の由緒書を紹介して―」（大阪大学芸術学・芸術史講座『フィロカリア』十四号）によれば、幕末の紀州藩お抱えの藩士を記した『文久紀士鑑』に

「御役者大坂住小鼓 小松原伝四郎」とあるところから、伝四郎は紀州藩お抱えの小鼓役者であることが知られる。また、紀州藩お抱えの能役者が藩に提出した由緒書があり、その中にはともに文化十二年（一八一五）提出の先祖書と親類書がみられる。その先祖書によれば、文化十二年時点のお抱え役者であった小松原伝右衛門は、先祖代々紀州に住まいしており、万治年中（一六五八～六一）に大坂へ移住した。伝右衛門自身は寛政十年（一七九八）に召し出だされ、文化四年にお抱え役者となっている。そして親類書には、伝右衛門の一族につき「総領 小松原伝四郎」と書かれているので、伝四郎が伝右衛門の長男であることが分かる。なお、父の伝右衛門は文化三年の『乱舞人物録』に、大坂住の紀州御役者で大倉流小鼓方と出ている。

ではまず、嘉永三年二月二十六日から翌二十七日にかけての詰方日記の記事を以下に示す。

- 一、廿六日 今明日、船町小松原伝四郎宅能興行有之。廣岡久右衛門案内二而見物罷越。上野又蔵・中村甚蔵・宗弥一郎同道。
御小人為次召連。

能組

翁 白髭 俊成忠則 小原御幸 鉢木 大江山
牛馬 悪太郎 連歌十徳 金津地藏 白髭之間 観進聖^(勲)
一、廿七日 晴 小松原宅能見物、七時相済。後席九郎右衛門丁
堺屋辰三郎方へ船二而参。(中略)

能組

田村 井筒 段ノ序 大会 海士変生男子 熊坂 □平 囃吐
御茶ノ水 うつほ猿

大岡は両日にわたり、小松原宅へ能見物に出かけているが、この両日については、天満天神の神主家である滋岡家が記した日記類のうち、嘉永三年の『日記仮控』（大阪大学日本史研究室蔵）にも記載がある。すなわち、当時の当主（正確には神主就任以前）の滋岡功長も、この時に小松原宅へ足を運んだということである。以下に『日記仮控』に見られる両日の記事を示す。

・二月二十六日

一、齋藤町小松原宅能見物へ行。家内召連行。又、座摩渡辺近江守も同道也。(中略) 有功卿の和歌短冊一枚、小松原伝四郎、座摩被送事候。

小松原へ 青松の花のむしろのわたもあれと 小松か原にしく
もの八なし 有功

右、小松原所望□被送事候。

・二月二十七日

一、小松原能今日も有之候故、家内召連行。昨今要人留守ヲ頼入候事、代二社へ八小林左内出入。

これらの記述からは小松原に和歌を記した短冊が贈られたことが知られるが、演能の内容については記されておらず、ここでは大岡の日記が小松原宅での上演曲目を知りうる貴重なものである。

ここで小松原宅の所在地について少し説明しておく。その所在地を、詰方日記では船町、滋岡家日記では齋藤町と記している。この両町は、筑前の蔵屋敷から南へ向かい筑前橋を渡って少し東にある、西横堀に接する町で、北に船町、南に齋藤町がある。したがって両町は隣接しており、いずれにしても筑前の蔵屋敷から程近い場所である。そのような地理的な便宜も、小松原との交流の一因になったと考えるのはあながち無理ではないであろう。

ところで、職分である大坂の能役者の住所と姓名を記した『芸道職分規定書』（嘉永七年（一八五四））⁽²⁾には、伝四郎の父である伝右衛門の住所について「齋藤町尼ヶ崎橋筋北江入東側」と記している。

そのため、伝四郎が父である伝右衛門の居住地にそのまま住まいしていた可能性も高いと考えられる点、また大岡は他国の者であるのに対し、滋岡は地元の名所に詳しいと思われる点を考えても、彼の居所は齋藤町と見るのがより正確であろう。

なお、滋岡家の日記類にはこの前後、小松原伝四郎との交友を示す記事が多数見受けられるので、詰方日記の考察からはやや逸れるが、参考までにどのような事項が見られるかを挙げておく（記事冒頭は順

に年、月、日）。

弘化二、五、一九 小松原伝四郎入来、当月二十八日の囃子奉納について。

三、八、一 小松原伝一郎方より催能番組来る。

八、四 小松原へ祝儀銀一両持たせ遣わす。

十、二二 小松原宅で追善能、見物に行く。

十、二四 小松原宅へこの間の棧敷料、金二百足持たせ遣わす。

十、二七 小松原宅催能の雑費割り方書付を、寺井・小谷へ遣わす。

四、正、一九 小松原松囃子につき行く。

八、一一 小松原能へ家内召連れ行く。

五、三、二三 小松原へ金百足遣わす。

五、九 小松原宅能見物に四人で出向く。棧敷料計二百足、うち百足を功長負担。

嘉永元、七、二九 小松原伝四郎へ一調の門会へ行く。

七、三〇 昨日の礼に金百足送る。

八、一一 小松原へ行き、銀一両遣わす。倅が獅子を、初めて去る七日に勤めた祝儀。

八、二六・二七 小松原能へ家内召連れ行く。

九、五 奉納囃子和楽講、小松原の方也。

一一、六 小松原能へ家内召連れ行く。

一一、七 今日も小松原能へ数人で出向く。

一一、八 小松原へ祝儀一両送る。

一二、二、一三 小松原伝四郎の、当月十七、十八日両日の能見物を断る。祝儀銀一両は送る。

一二、一七 小松原能今日、明日あり。

一五、二五 小松原伝四郎入来、来ル三十日奉納離子の件を申し来る。

す。

五、二一 小松原奉納離子あり。

といった記事が続いており、滋岡と小松原が親密に交際していた様子が伺える。

さて、詰方日記の内容に戻ると、これ以後も小松原宅での演能を示す記事がいくつか見受けられるので、以下に挙げておく。なお、以下の記事については今のところ裏付けとなるような他史料の記録は見出せていない。

・嘉永三年五月七日

小松原伝四郎宅稽古能有之。廣岡案内二付昼後見物能越。

九郎右衛門 三次郎 九郎右衛門 三次郎 禎之助
歌占 江口 唐船 長良 黒塚

鬼丸 鷹礫 二人袴 瘦松

二月六日

一、小松原伝四郎方へ稽古二出候処、よめ安産也。女子出生。仍て安産見舞小鯛五枚、又さけ二升、祝二小松原へ送也。

この記事から、滋岡が小松原に稽古をつけてもらっていたことが分かる。これに続き、さきに示した二月二十六、二十七日両日の記事があり、その後は、

嘉永三、三、一一 小松原より使いあり。出生の女子初めて入

来。

三、一九 小松原伝四郎入来。

五、六 小松原へ明日、明後日の能祝儀銀壹両遣わ

・嘉永三年五月八日

小松原能見物、上野・宗・高瀬。

禎之助 九郎右衛門 禎之助 三次郎 九郎右衛門
放下僧 柏崎 芦刈 融 遊曲 竜虎

口まね聲 縄ない 十口 千切木

これらは小松原の自宅で二日間、稽古能が行われたことを示すものである。ここでシテを務めているのは片山九郎右衛門、野村三次郎、野村禎之助の三名である。

・嘉永三年八月二十日

小松原宅能興行有之、例之通廣岡棧敷へ見物罷越。上田・宗・高瀬・清水同道。但両日催有之、両日共罷越。

能組

枕慈童 三次郎 禎之助 三次郎 禎之助
俊寛 小鍛冶 百万 夜打曾我
かづ葉練 不見不聞 腥物 雷

・嘉永三年八月二十一日

鶺鴒 羽衣 山姥 仕舞 三次郎 禎之助 三次郎
高野物狂 昭君 巴

一調 梅枝 小松原 松山鏡 橋本熊三郎 語 鱸包丁
森源六

烏頭 殺生石

鷄流 蟹山伏 悪坊 武悪

「一調」では二十一日に小鼓で『梅枝』が披露されているが、この演奏者が小松原伝四郎であろう。

・嘉永三年十一月十一日

小松原宅能興行有之、例之通廣岡棧敷へ案内罷越。上田・青柳・

中村・入江。

能組

九郎右衛門 禎之助 九郎右衛門
玉井 飛鳥川 小袖曾我 国栖
三次郎 脇語 齋賀猪平 舟歌 鷺源右衛門

塗附 入間川 柿山伏 文荷

・嘉永三年十一月十二日

右同断。

禎之助 九郎右衛門 三次郎 禎之助 九郎右衛門
通盛 熊野 (邯鄲) 歌占 野守

二千石 井杭 宗八 狐塚

後席船二而堺達方へ参候、上田・廣川・青柳・川邊。

・嘉永四年二月十八日

小松原宅能興行、毎之通り。廣岡棧敷へ見物罷越。上田・廣川・青柳・清水。後席堺屋辰三郎方へ参。

翁 三次郎 養老 薬水 金剛一次郎 尾木平十郎 三次郎
石山五郎助 大仏供養 松風 葵上 昭君

鷄聾 飛越 連歌盗人 棒しばり

・嘉永四年二月十九日

能見物前日の通。

高村雅太郎 三次郎 平十郎 三次郎
春栄 花筐 是界 白頭 藤戸 烏帽子折
竹生嶋参 清水座頭 千鳥 かゝみ男

以上に引いたように、小松原宅で稽古能が催される場合は二日続けて、曲目を代えて行われるのが通例であったようである。また、シテの役者もある程度固定しており、それらが丁寧に控えられているのに対して、狂言については曲名のみが記されていて役者名には触れていない点は、大岡の関心の差を示しているように思われる。また、嘉永三年十一月十二日と、同四年二月十八日の終演後には、堺屋辰三郎方（前者では「堺達」と表記）へ出向いている。おそらく酒宴を催したのであるが、これも特徴の一つといえるだろう。小田氏の前掲論文や、それに先立つ宮本又次氏「大阪の蔵屋敷と蔵役人」（『大阪の研究』第三巻所収）にも、蔵屋敷役人の接待として曾根崎新地や新町が栄えたことが論及されている。とくに曾根崎新地の一流の茶屋は「振舞茶屋」と称されて頻繁に利用されたが、ここに見られる堺屋辰三郎は、道頓堀の九郎右衛門町に位置する茶屋である（小田氏前掲論文による）。

次に、小松原とは直接関係のない能興行を示すものについて見ておきたい。以下に表れる能の上演場所は、いずれも櫓村である（嘉永年間二件、文久年間一件）。

嘉永三年三月二十四日の詰方日記には「櫓村常舞台二而能興行有之」とあって、能および狂言の曲名と、能のシテ役者名が記されている。ちなみに曲名だけを以下に記すと、能が『絵馬』『関原与一』『花筐 舞入』『道成寺』『船弁慶 語 船哥（唄）』、狂言が『靉猿』『武悪』『簸屑』『木六駄』となっている。

この日の催しについては、『浮世見聞集』第七巻（大阪府立中之島図書館蔵）に番組の写しが控えられて残されているので、以下に示す。

三月廿四日 於櫓村常舞台

能組

片山九郎右衛門

絵馬 中村弥三郎

江崎茂八郎

松井友三郎

糟谷卯左衛門

橋本柵内

靉猿

磯川徳五郎

原 孫一郎

古春増五郎

関原与市 江崎千之助

石井孫兵衛

橋本又八郎

武悪 高安又太郎

片山九郎右衛門

谷又左衛門 渡辺正蔵

花筐 高賀猪平

糟谷伝次郎

舞入

森源六

簸屑 柳川源太郎

古春左衛門

道成寺 中村弥三郎

石井 孫兵衛

佐々木又吉

足立保右衛門

渡辺徳蔵

間 藤田三十郎

木六駄 正木直二

野村三次郎

石井仁兵衛

橋本熊三郎

船弁慶 高賀猪平

糟谷卯左衛門

橋本又八郎

語

船唄 鷺源右衛門

附祝言

始正卯半時、雨天二候八、翌日

文末に記された文言は、番組に初めから記されていたものをそのまま写したものと考えられる。大岡が詰方日記に記したのは、これと同様の番組のうち、その曲目部分だけを書き記したものと思われる。

同年四月十二日の能興行も詰方日記に記載があるが、こちらは他の記録による確認はできていないのでそのまま紹介する。

於榎村能興行有之。御蔵元々案内、見物罷越。後河佐。

番組

野村禎之助 野村三次郎

片山九郎右衛門

野村三次郎

片山九郎右衛門

小督 一人静

乱

正尊

是界

栗田口 素袍落 瓜ぬす人 鈍太郎

ちなみに、見物後に向向いている「河佐」は能見物や芝居見物の際

にたびたび訪れているが、小田氏の前掲論文によれば、これは曾根崎新地二丁目の茶屋で正式には河内屋佐兵衛である。

文久二年（一八六二）二月二十七日には次の記事が見られるが、四

度目詰方日記に見られる公的な場所での演能は次の一例のみである。

榎村二而、脇師 浅野清左衛門先代追善之能興行有之。御蔵元

々案内、見物罷越。清左衛門江祝（儀方）義金百足遣。同道之向ふも一

封遣。

生一秀之助

永井喜太郎

野村三次郎

高村太左衛門

片山九郎右衛門

蟻通

熊野

望月

羅生門

春栄

濱田惣三郎

融

昆布つり 真奪

伊文字

ひくず（音）

但拙者着盃兼用二而案内帰路老松丁鰻屋わた平へ立寄、夜食出ル。

この日は終了後に、中之島の近くにあたる老松町の鰻屋へ出かけているが、催しの終了後に料理屋で酒宴を催す例は、これまでもたびたび見られた通りで、遊宴は頻繁に行われたものようである。

(三) 謡講など稽古会

詰方日記からは能の見物のほかに、素人による謡の会も開かれていた様子がうかがえる。これは謡講と称されている。

謡講の記事が初めて見られるのは天保十一年八月二十二日である。

「堂嶋於池卯宅講講催有之、聞二参」という簡単な記事で、「講講」

とあるのが謡講の書き誤りと思われる。そう推測できるのは、以降に謡講について記したものが幾つか見られるためである。そのような謡

講の記事のうち、曲目が控えられたもの二例を以下に示す。

・嘉永三年五月二十六日
拙者於御長家謡講相備。

加茂 ^{上野}佐平 井筒 ^{七郎平}芳平 安宅 ^{久右衛門}寸松

独吟

卒塔婆小町 寿山 甘鄴 ^(部)市三郎

一調

弱法師 寿山 伝四郎 夜打曾我 ^(ママ)同上 ^{久右衛門}鶴ノ段 芳平

伝右衛門

白梁天 ^{寸松}同上

ここで一調に名前の見える伝四郎、伝右衛門はそれぞれ小松原伝四郎、小松原伝右衛門であろう。

・嘉永四年二月二日

於御長家謡講。鶴亀 大西新造 熊野 廣岡久右衛門

弱法師 鴻池芳平

猩々 鴻池寿山

一調

松風 小松原伝四郎 笠之段 小松原伝右衛門

放下僧 伝四郎

景清 ^{太鼓}天王寺屋佐兵衛 八嶋 大 新造 松虫 伝右衛門

こちらの項からは、先の記事で姓が記されていないかつた人物が特定

できる。その中では、廣岡久右衛門が着目しておくべき人物である。廣岡は福岡藩出入りの御用商人とみられる。とくに小松原宅での能興行の際に大岡を同道し、「廣岡棧敷」で見物したとの記事が度々見られる。この廣岡が小松原の門弟であったため、大岡は小松原宅の演能や、このような謡講に顔を出していたものである。

このほか文久元年十二月八日の謡講では、謡の曲目が記されているほか仕舞、一調などがあつたと記されており、また文久二年六月七日にも謡と仕舞、独吟が行われている。これらを見ると、筆者である大岡克俊の名は出てこないため、自身が稽古に行っていたのではなさそうである。廣岡との交際の縁で、小松原伝四郎のところへ出入りしていたものと思われる。

本職による能の上演を見物するだけでなく、素養としての謡や、鼓など鳴物の稽古を通じても能とのかかわりが見られるのがこの時代の特徴であり、それは惣年寄を勤めていた永瀬家の日記類からも伺えだが、武士身分である大岡もやはり演能と謡講という両面から能とかわつており、芸能全体の中でも能との関係が最も強かつたといえる。

二 歌舞伎

歌舞伎と人形浄瑠璃の芝居興行のうち、ここでは歌舞伎を扱う。歌舞伎の上演場所としては、道頓堀に位置する芝居小屋が最も格の高いものであつた。それら数軒の芝居の中でも、その規模や出演する役者

の格差によって違いはあったのだが、道頓堀に位置する芝居はいずれにしても恒常的な興行権を得ていたのである。その中で「大芝居」と称される、最も格の高い小屋は角芝居と中芝居の二座であった。大坂では天保十三年（一八四二）からの天保改革によって、新地と宮地（寺社の境内）に位置していた芝居は取り払いを命じられることになる。これについては人形浄瑠璃のところでも触れるが、詰方日記に見られる歌舞伎の記事に名の挙がる芝居小屋については、ひとまず時期による性質の変化や改革の影響などは考慮しなくてもよいかと思う。

では、詰方日記に現れる歌舞伎芝居見物の記事について見ていきたい。歌舞伎見物の総数は九件である。そのうち一番最初の記事である、天保十一年（一八四〇）三月二十六日の記事は以下のとおりである。

廣田・南部江離盃案内二而、山中の 道頓堀 角芝居へ罷越。帰路嶋之内河作方立寄。

これ以降の記事も多くがそのようなのだが、芝居見物は誰か誘いかける人物があつて、いわゆる接待として出かけたような様子が強く感じられる。そのためか、終演後も多く料理屋へ足を運んでいる。この時は島之内の河作（4）へ出向いている。

では日時からこの日、大岡が見物した芝居内容を推察してみよう。役割番付から考えると、角芝居で「三月吉日の」と表記のある番付が確認できる。外題は『仮名手本忠臣蔵』と『平家女護島』であった。市川団蔵（五代目）、中村芝翫、実川延三郎らが出演している。次に

役者評判記を見ると、天保十二年の『役者舞台扇』では、立役の市川団蔵が大星由良之助の役について工夫をしたとの、次のような記述が見られる。

「頭取」次ノ替り忠臣蔵二高の師直役、（中略）二役大星由良之助、四段目かけ付る所、成程国家老といふ年配の作りよふムリました。主人の有様を見てうつむき何もせず、又九寸五部（325）を受取てからも無念のこなし八ちよつとあつた俵じゃが、余人がすると九寸五部を受取時、無念の腹をしらるゝが、団蔵丈一向仕内なかつたが、よふかんがへて見ると、薬師寺なぞかいる内ゆへ、あまりむかふで無念がると敵へ用心さすやうな物。それゆへ団蔵丈、此所で何もせられぬと見へ升る。それよりかほよ御前を始、焼香をねんころ二さす所、よふムりました。

団蔵が勤めた大星由良之助の役においては、他の役者が主君の塩冶判官から形見の短刀を受け取るところで無念の心持ちを表すところを、敵へ悟られぬようにとの思い入れからそのシーンでは別段の演技はせず、他の場面の演技も行き届いており好演であった、との評価がなされている。

この他、初度目の詰方日記に見られる芝居見物の記事二件を次に引く。

・天保十二年閏一月二日

名代中御講二付、道頓堀中ノ芝居へ見物罷越。富田屋市左衛門仕出。

・天保十二年四月十六日

御蔵元の離盃案内、道頓堀中之芝居見物罷越。

閏一月二日は「名代中御講」の催しとして出かけたということであるが、これについては日記中にたびたび見られるものの、詳細は明らかでない。「富田屋市左衛門仕出」とは、富田屋という料理屋の仕出しをとったという意味かと解釈する。

四月十六日の見物は御蔵元の案内となっており、同様のケースは他の見物の際もしばしば見受けられる。この蔵元については、小田氏の前掲論文で、今橋二丁目の山中善五郎、屋号・鴻池善五郎が福岡藩の蔵元と紹介されており、この人物と考えられる。蔵元は近世初期には藩の役人が勤めていたが、次第に富裕な町人が起用されるようになった（吉川弘文館『国史大辞典』）という。

さて、上演内容について役割番付から推定するに、閏一月二日に上演していたと思われるのは、この年正月吉日からの『けいせい揚柳桜』と『浪花海三津汐汲』で、中村富十郎、中村芝翫、三桝源之助らの出演である。後者は四月吉日からの『天満宮菜種御供』、『男作五雁金』、『夕霧廓文章』の期間中と考えられ、座組は正月と多少の入れ替わりがあつて、富十郎、芝翫、市川団蔵らの出演であつた。

二度目の詰方日記の期間中である、嘉永三年（一八五〇）から四年にかけての芝居見物は四件を数える。嘉永三年四月三日の記事は以下のとおり。

御銀主名代中お講打寄二而、道頓堀中之芝居見物罷越。但例正・

五・九月打寄、当正月延引之末、今日催有之。後席富田や市郎兵衛。

衛。

他の記事にもただ「名代中」との語も見られるが、名代中とはすなわち銀主の名代であることの推測ができる。また、この銀主も、いわゆる芝居の出資者ではなく蔵屋敷の金銭の後援者と思われる。そして見物後は、料理屋の富田屋市郎兵衛方へ出向いた模様である。役割番付から推定すれば、三月吉日からの三ノ替り狂言『妹背山婦女庭訓』『堂嶋救入濱』が上演中で、中村歌右衛門、三桝大五郎、実川延三郎らが出演している。このうち中村歌右衛門は四代目で、華々しい活躍を見せた三代目の門弟であるが、先代に劣らず幕末を代表する名優として活躍した。なお、嘉永四年正月刊の評判記『役者清榊葉』には、歌右衛門と延三郎の項に、『堂嶋救入濱』が不評であつたと記されている。

同年八月十五日の記述は以下のとおりである。

三家名代中の案内、道頓堀中芝居見物罷越。内茶屋木之元屋徳兵衛。

外題 児ヶ洩恋白浪 中村歌右衛門

切狂言 義経腰越状

帰路河佐へ罷越。上田・宗・高瀬。

詰方日記の芝居関係の見聞で、外題や役者名が記されているのはこれが初めてである。何度が歌舞伎見物に出向いているうち、筆者の大阪が内容にも興味を持つようになったとも考えられる。また、「内茶

「屋」は芝居茶屋かと思われる。

歌右衛門は先にも記した通り当時の代表的な名優で、この芝居でも児の捨若丸・のちの石川五右衛門など三つの役を演じていた。この時の評が『役者清神葉』にも見られる。歌右衛門クラスの大立者になると、評判記でもあまり悪評は書かれないが、この際の興行は中村玉助（三代目歌右衛門。晩年に玉助を名乗った）の十三回忌であったことを紹介した上で、「梅升丈（筆者注・三楯大五郎）久よし二而巡礼姿のせり上、御両人の幕切大あたり〜。先五右衛門、三がの津で此人二かきり升」などとその芸を評している。

同年十月十六日には次の記事が見られる。

竹中内分二而銀方其他同道、芝居見物出浮。拙者八不参候事。

このケースは、結局大岡自身が芝居を見物していないのであるから、具体的な内容も当然ながら記されていない。では、この芝居見物ほどの小屋と推定できるであろうか。ここで先に、この次の芝居見物事例である、嘉永四年二月五日の記事を見ておきたい。嘉永四年に見られる芝居見物の記事は、この一例のみである。

今日お講催二付、御銀主名代中一同、道頓堀中之芝居見物罷越。

富田屋市兵衛仕出。帰路河佐へ参候。上田・青柳。

ここでは「御銀主名代中一同」とともに、中の芝居へ見物に出かけている。同伴者に留意して他の記事から同様のものを探すと、嘉永三年四月三日の事例もこれに近い。その記事は「御銀主名代中お講打寄二而、道頓堀中之芝居見物」というもので、やはり中の芝居の見物で

ある。銀主を伴って見物している場合、いずれも中の芝居へ出向いているところから、十月十六日の芝居行きも、やはり中の芝居ではなかったか。事例全体としては中の芝居の見物が断然多いのであるが、ここもそう考えてよいように思う。中の芝居であると仮定すれば、この月は、九月吉日よりの『花街模様劇稲妻』と『廓文章』を上演していたと役割番付から考え得る。出演役者は歌右衛門、大五郎、延三郎、中村友三らであった。また、嘉永四年二月五日の上演にも触れておくと、この日はこの年正月吉日からの『けいせい清船諷』『初戎福徳歌』が上演中であった。こちらも歌右衛門、大五郎、延三郎をはじめ、山下金作が出演している。

四度目詰方日記には、二例の歌舞伎見物記事が見られる。文久二年（一八六二）二月十五日の記事は次のとおりである。

天五以下、加嶋重（校訂者注・加嶋屋重郎兵衛）迄一同之催二而、中ノ芝居へ見物罷越。

傾城廓大門 今村・宗・吉井父子 金子・柴藤・豊嶋

天五は天王寺屋五兵衛で、天保六年には福岡藩の名代を勤めていた（小田氏前掲論文）。ここでは大岡は『けいせい廓大門』のみ外題を記しているが、この公演は正月吉日からのもので、ほかに『乱咲姿若草』も上演されたことが番付から知られる。尾上多見蔵、実川延三郎、嵐吉三郎らが番付に名を連ねている。

文久二年三月二十日の記事は以下のとおりである。

三家名代中案内二而、道頓堀大西芝居へ見物罷越。

忠臣蔵 茶屋かと平

宗・牧・金子・柴藤・豊嶋同伴。

詰方日記に見られる芝居見物のうち、大西芝居へ出かけているのはこの一例のみである。大西芝居は近世後期に用いられていた通称であるが、松本名左衛門の名代を継ぐ歌舞伎の小屋で、この時期には筑後芝居が正式な名称であった。役割番付でも天保改革以前から改革政策実行の時期までは、大西芝居と筑後芝居の表記が混交しているが、天保十四年以後は筑後芝居と記されることが多くなっている。この時大岡の一行は中の芝居よりも、人気狂言である『仮名手本忠臣蔵』にひかれて筑後芝居へ出かけたのではないだろうか。出演は尾上梅幸、大谷友松、尾上松緑、嵐大三郎らであった。翌文久三年正月刊の役者評判記『役者日本鑑』では、尾上梅幸が桃井若狭介、早野勤平、斧定九郎の三役早替わりを演じたことについて記している。なお、この梅幸は後に初代実川延若を名乗って、明治前期の大坂歌舞伎の大立者として活躍した役者であるが、梅幸の代数には数えられていない。

このように詰方日記に現れる歌舞伎芝居見物は、場所が明記されていない一例を除き、すべてが道頓堀に位置する芝居小屋においてのものである。文久年間には寺社境内の芝居も復活していたのだが、これらの記事は、歌舞伎見物といえは道頓堀に勝る場はない、という当時の大坂の実状を反映したものと見える。

二 浄瑠璃

人形浄瑠璃は大坂でたいへん栄えたもので、とくに近世初期から中期にかけては歌舞伎と並ぶ中心的娯楽であった。大坂でも道頓堀が開発された近世初期から、人形芝居の小屋が歌舞伎とともに興行をしていた。黄金期には竹本座と豊竹座の二座が覇を競い合い、人形浄瑠璃の繁栄を見た。だが時代の変化に伴い、豊竹座が明和二年（一七六五）に道頓堀から退転、竹本座も二年後の明和四年に道頓堀から退転した。以後は道頓堀での人形浄瑠璃興行が、恒常的なものとしては見られなくなり、上演の中心地は堀江市之側などの新地芝居や、さらには宮地の芝居に移っていく。詰方日記が記された時期は、人形浄瑠璃が宮地の芝居を主な活動の場としていた時代であり、計四件の見物事例はすべて宮地の小屋でのものである。

人形浄瑠璃を見たとの最初の記録は、天保十一年（一八四〇）九月十日にみられるが、「御蔵元〆案内、御霊宮社内人形芝居見物罷越。後席河佐」という簡単なものである。この御蔵元とは鴻池屋（山中善五郎である（小田氏前掲論文による）。大坂では船場の域内に宮地芝居の盛んな神社が数カ所存在しており、ここに見られる御霊宮のほかには坐摩社や博労稲荷（難波神社）でも人形芝居がかかっていた。そのなかで御霊宮は最も北に位置しており、おそらく蔵屋敷からも比較的近いといった事情があったかと推察される。

興行番付(『義太夫年表』所載の役割番付および考証による。以下の興行についても同様)によれば、九月十日は八月十九日から始まった『五天竺』の興行中であつた。太夫では豊竹若太夫、竹本綱太夫、三味線は鶴沢寛治、人形遣いでは吉田金四、吉田金三、桐竹門蔵らが出演している。

次の事例が翌天保十二年二月三日で、「御蔵元誘引二而、南稻荷社内人形芝居見物罷越」とあり、やはり御蔵元の誘いで人形芝居の見物に出向いている。南稻荷とは博勞稻荷(現・難波神社)である。やはり番付から推察すると、この時は閏正月十三日より公演中であつた『妹背山女庭訓』、『御所桜堀川夜討』三段目、大切に景事『戻り駕廓大全』が演じられている。番付では公演場所が「稻荷社内東芝居」となっており、これはすなわち文楽軒の芝居である。二代目の文楽軒が文化八年(一八一)から博勞稻荷の境内に小屋を設け、それ以来、大坂の宮地で行われた人形浄瑠璃興行は、この博勞稻荷の文楽軒芝居と、さきに記事が見られた御霊社の芝居の二カ所が中心であつた。

天保五年(一八三四)に記された、『大坂名所一覽記』(国立公文書館蔵)と題された見聞記がある。筆者の山崎尚友については詳らかではないが、江戸出身の、おそらく武士身分の人物と考えられる。その記述中には、博勞稻荷の説明として「大坂にてはくろいなりの芝居八、年中うちつゞけ二て、いつも人多しとなん。大坂にて人形八はくろに限るが如し」との風聞が見られる。

以上の二例は、初度目の詰方日記に出てくるもので、天保改革によ

る宮地芝居の禁止より前の時期にあたる。この後、天保十三年に改革の施策として宮地芝居の禁令が発せられ、しばらくは寺社の境内から歌舞伎と人形浄瑠璃が姿を消すことになる。

二度目詰方日記の記された嘉永三年(一八五〇)から四年にかけての時期は在任期間も長かつたのだが、この期間には人形浄瑠璃を見物したとの記録は一件も記されていない。これはちょうど宮地の人形浄瑠璃が禁止されていた時期で、手軽に見に行く機会を得なかつたのであろう。この時期、人形浄瑠璃は道頓堀の竹田芝居や若太夫芝居で単発の興行がなされていたほか、見世物興行の許可地であつた西横堀新築地の清水町浜で、主に素浄瑠璃の公演が行われていた。

四度目詰方日記が記された文久年間には、二例の人形芝居見物の記事が見られる。まず文久二年(一八六二)一月二十二日の記事は次のごとくである。

御蔵元初、一統名代中より之案内二而、稻荷宮社内人形芝居見物罷越。

大江山酒吞童子 御屋敷前船二而参ル。今村・宗・金子・柴藤・豊嶋・中村三郎。

これも博勞稻荷における文楽の芝居を見物した記事で、蔵屋敷の前から船で西横堀を南下し、博勞稻荷へ向かつたと思われる。番付によれば確かに正月吉日より、稻荷社内東の芝居では『大江山酒吞童子』の通し上演が行われている。この時の出演者は太夫が豊竹湊太夫、竹本弥太夫、三味線が豊沢団平、鶴沢勝右衛門、人形遣いが吉田玉造、

吉田松江、吉田文三といった顔触れであった。

次に同年五月二十七日の詰方日記には次のようにある。

三家名代中同道、稻荷社内文楽茶店人形芝居見物罷越。帰路河佐亭へ立寄。夜飯等饗応有之。

今村・牧・吉井・金子・柴藤。

この時の公演は、五月五日から興行中の『絵合太功記』『八重霞浪花浜萩』であった。『義太夫年表』の解説によれば、この時期は市中に麻疹が流行して病人が多く、この興行も六月五日切りで休演になったという（典拠は『浄瑠璃大系図』）。

ちなみに天保改革時の宮地芝居の禁令は、次第に弛緩して安政元年（一八五四）には小屋も復活しはじめており、文楽軒芝居もこの年に博労稻荷の境内に戻っている。そして安政四年には宮地の芝居が法的にも再び解禁となっていた。人形浄瑠璃の見物にかかわるのは以上の四例であるが、宮地の芝居小屋が活動の中心であった、近世後期の動向を忠実に示しているといえよう。

このほかに、素浄瑠璃の催しの記事が二件見られる。最初は天保十一年十二月二十六日で「御蔵元今案内、南河作方江罷越。浄瑠璃催有之」との簡単なものであり、出演者も外題も控えられていない。しかし文久元年十二月二十一日の日記には詳しい内容が書き留められている。

於玉藤お講打寄罷越。浄瑠璃催有之。

竹本長枝太夫

二十四孝四段目

糸
鶴沢九藏

平仮名盛衰記

三段目

竹本弥太夫
鶴沢九藏

菅原伝授 四段

目

竹本湊太夫
鶴沢勝右衛門

これは私的な催しに本職の太夫と三味線弾きを招き、浄瑠璃を楽しむんだことを示すものであるが、ここで浄瑠璃を語っている弥太夫、湊太夫らは当時のかんりの実力者である。例えば、この年六月刊の見立番付『三都太夫三味線操見競鑑』（『義太夫年表』所収）によれば、「豊竹」湊太夫は西方の関脇、竹本弥太夫は西方前頭の筆頭格、竹本長枝太夫は東方の前頭の二群目という位置付けになっている。また三味線も、勝右衛門は西方前頭の筆頭格で格の高い人物であり、九藏は九造であろうが、西方前頭の二群目に位置しており、このころもすべて稻荷の文楽座に出演していた面々である。

四 見世物

一般的な傾向として、日記に見世物の見聞記が書き留められることは少ない。とくに公的な色彩が強い武家の日記ならなおさらである。この詰方日記にも、見世物関連の記事は三件見られるのみである。見

世物は芝居と違って一日がかりの見物ということもなく、実際には人々はよく足を運んでいたのであるが、やはり武士身分の大岡にとつてはさほど馴染みのないものであったのかもしれない。

事例が少ないので、さきに見世物関連の記事三点を以下に示しておく。

天保十一年（一八四〇）四月八日 住吉宮参詣の帰路、難波新

地で多田丸曲馬見物

嘉永四年（一八五二）二月二十七日 難波新地見世物見物

文久二年（一八六二）三月七日 難波新地で豹の見世物見物

ここに挙げられた見世物が行われているのは、いずれも難波新地である。大坂の見世物興行場所について簡単に触れておくと、江戸時代初期から中期は、随筆類の記録によれば道頓堀で行われたことが多かったようだが、明和元年（一七六四）に難波新地が開発され、この土地の繁栄のため能舞台や相撲檣、芝居小屋（芝居は実際には設けられず）が許可され、芝居小屋が並ぶ道頓堀から程近いこともあって、次第に見世物など諸芸能の興行地として賑わうようになる。難波新地のほかには寺社の境内でも見世物興行が盛んに行われたが、天保十三年の天保改革で寺社地の芝居が禁止された後、この難波新地と西横堀新築地の二カ所が見世物類の興行許可地に指定され、とくに江戸時代末期には見世物興行の集中する場として栄えていた。日記の記載期間のうち、天保十一年は改革前、それ以後は改革後の様相を示した記事ということになる。

天保十一年四月八日の記事は以下のようなものである。

一、八日 晴 廣岡誘引二而住吉宮参詣、伊丹屋二立寄、廣田・南部・荻原・守田同道。帰路難波新地多田丸曲馬見物後、境屋へ立寄。

ここには難波新地で多田丸曲馬を見物したことが記されている。この時期は見世物についての記事が多い『摂陽奇観』や『近来年代記』の記録が残されていないこともあり、この興行については日時が適合する記録は見出せていない。

ただし、ちょうどこの時期の曲馬興行を示す史料が、惣年寄永瀬の同年の『公私日録』から確認できる。場所については記されていない簡単なものではあるが、四月十日に「力持・曲馬芝居見二罷越候」との記事が見られるのである。これが、力持と曲馬という二種の芸能を示したものであるということが、同史料の四月十六日に「弥衛太随進二為遊、馬芝居見度由二付、皆々同道いたし同所を出」とあるところから推測できる。この時期に行われていた曲馬がかなり好評で、しばらくの期間にわたり興行が続いていたものと思われる。

次に見られるのは、嘉永四年二月二十七日の記事である。これは「難波新地見世物見物参候。上田・鮎川同道」というだけの簡単なものだが、この時期の難波新地では、見世物界の第一人者が興行を行っていたことが他の史料から知られる。それは軽業芸の第一人者であった早竹虎吉である。『近来年代記』（『大阪市史料』第二輯所収）の嘉永四年冒頭には次のような記事が載る。

早竹虎吉のかるわざ

難波新地二において相勤る早竹虎吉先年より度々つとめ候所、又此度新工風をいたして正月二日分相始め候所、初日分大人二して其くんしう云計なし。大ひやうばんなり。先前芸二八曲こまをまわし、又大こま足二てまわし、本芸二八道具大仕かけ二して三疋猿とて三本竹足二てとめ、上へ三人をあげ、其あやうき事云計なし。

虎吉の人気のほどが伺えるが、興行期間については、この記述からは正月二日から始まったことしか分からない。

これを補足しうるものとして、同じ興行の記事が『浮世見聞集』(大阪府立中之島図書館蔵)の嘉永四年正月の事項として出ているので次に示す。

正月元日より難波新地溝の側二おゐて、早竹虎吉軽業興行有之。然ル所元日初日之所、如何成事二や、高き所分踏はつし候而怪我いたし候二付、療治中二日程相休、夫分引続興行いたし候所、段々大人群集二而四月末頃迄致事、古今之大はづみ、前代未聞之事共也。別而今年者此成年(筆者注・嘉永三年)分打続、米穀高直二而世上物さびしき所二、右様大人者又々格別之事なりと町中一統評判いたし候事。其後虎吉者難地二而新二宅ヲ構、妾宅等拵、安楽二くらしけるとなり。

これは末尾の記述内容から、後年になって記されたものらしい。開幕の日付が元日となっていて『近來年代記』とは相違しているし、ま

た虎吉はアメリカに渡って死没しているので、最後の部分の信憑性には疑問もあるが、珍しく失敗をして怪我をし、二日ほど休業したものの、その後も大入りが続いて四月の末頃まで興行を続けたという。二月二十七日に大岡らが虎吉の軽業を見物した可能性はじゅうぶん考えられよう。

さきに引用した『近來年代記』には虎吉の記事とともに、二月下旬に興行していたらしいものとして次の二件が確認される。

木馬かるわざ 増鏡 勝代、山本国之助、同宇之助

此芸八木馬乗りと号して、前芸二して木二て馬をいたし、馬之足に車を付、ぜんまい二ていのく(筆者注・動くの意)なり。一向まどろしき也。又次二字之助足之曲をいろく^マと致し、切芸八綱渡し、又八一本竹とて肩二てとめ、上へ小児を登^マのせ、様々ときよくをいたし、下二八三味線をひき、其あやうき事云計なし。されとも虎吉二おされて一向はやらさりけり。

曲馬乗西遊記 樋口弥太郎、同一座連中

右馬乗二て西遊記初段より取組いたし候得共、一向中はやりなり。二月下旬分致し三月下旬二尾^マる也。虎吉八正月二日より四月下旬二て、入八おちさりける。猶此外二^マ加^マを^マとげ開帳いろく^マと見世物有と、只々虎吉のみ大ひやうばんなり。

「曲馬乗西遊記」の記事でも、虎吉の軽業は四月下旬まで長期の興行をしていたとしており、これは『浮世見聞集』の記述とも合致する。また、そのため他の見世物は虎吉に押されて不入りであったこと

が分かる。福岡藩士の大岡も、そのような評判の立つ虎吉の軽業を見物に行った可能性が高いのではないだろうか。

これらのほか、文久二年三月七日に難波新地で豹の見世物を見物したという記事があるが、簡単な記述である上に他史料による確認はできず、これ以上のことは明らかにしえない。

五 相撲

最後に、相撲興行についても触れておくことにする。幕府公認の勸進相撲が大坂で行われたのは元禄十五年（一七〇二）、堀江新地においてのものが最初である。一部の史料や文献には元禄五年から堀江で勸進相撲が始まる、と記すものがあるが、元禄十二年に堀江新地開発による土地繁栄策として、この地に相撲場が認められたことを勘案しても、元禄十五年に開始されたとするのが妥当であろう。以後、大坂における勸進相撲は堀江を主な開催地としてきたが、明和元年（一七六四）難波新地が開発され、こちらにも相撲場が認可されたので、明和二年以降しばらくの間は、堀江と難波の両所で勸進相撲が開催されることになる。その頻度は当初が各々の場所で年に一度ずつ、都合一年に二度、のちに安永三年（一七七四）以降は隔年ごとに開催（『大阪市史』第二による）といったものであった。しかし寛政年間以降は難波新地での開催が過半数となり、とくに文化四年（一八〇七）からは難波新地に開催地が固定されている。その後、また開催地の変化が

あり、弘化二年（一八四五）に天満の砂原屋敷で初めて勸進相撲が開かれ、以降は砂原屋敷での開催が増えている。なお、これらは勸進相撲開催地のおおよその傾向であるが、そのほかにも稽古相撲などと称される小規模の相撲興行が、これら以外の場所も含めて頻繁に行われていた。

では詰方日記の相撲にかかわる記事を見ていく。天保十一年（一八四〇）の六月から七月にかけて、勸進相撲の一連の記録が見られるので以下に紹介する。この折の勸進相撲は、『史料集成江戸時代相撲名鑑（上）』によれば天保十一年六月吉日より晴天十日で、難波新地で行われたものである。²⁾

・ 六月二十九日

頃日於難波新地勸進大角力興行有之。今日四日目、御蔵元案内二而見物罷越。昼後雨二なり止。後席河作行。

・ 七月二日

四日目角力雨天二而相止候付、今日又々御蔵元案内二而見物罷越。

・ 七月三日

五日目角力、天忠案内二而見物罷越。後席河作

・ 七月四日

六日目角力、長田案内二而罷越。後席右同。

・ 七月六日

八日目角力、御蔵元分後日之案内二付、昼後分罷越。

これらの記事から伺うところ、晴天十日で開催される勧進相撲の期間中に計五回の見物に出かけている。しかもそれらは、御蔵元を中心に様々な人物が誘いかけてきており、打ち出し後は、芝居見物の後にも利用していた河作へ出向いて飲食をした模様である。相撲見物も、能や歌舞伎と同様に重要な接待の場であったことが改めて感じられる。なお、天保年間においては、この時の勧進相撲興行の場である難波新地が、最も頻繁に勧進相撲の開催される場所であった。

この時の勧進相撲については、惣年寄永瀬七三郎の天保十一年の『公私日録』にも次の記事が見られる。惣年寄が公務としての見分を通じて、相撲と関わっていたことを示すものである。

- ・ 七月二日
- 一、難波新地相撲四日目、七三郎当番二付出役。
- ・ 七月五日
- 一、昼後難波新地相撲七日目、七三郎出役。

・ 七月七日
相撲九日目、当番二付出役致候。

福岡藩の大岡は計五日間見物に出かけていたが、いっぽう永瀬は三日間見分に出向いている。

もう一例の勧進相撲は嘉永三年（一八五〇）のものである。こちらは天満の砂原屋敷で開催されている。この年八月六日の詰方日記に次の記事が見られる。

天満砂原屋敷二而、去ル朔日角力芝居始。当年八中角力二而評

判不宜、見物少く候よし。

これも勧進相撲であるので、十日間にわたって行われたはずであるが、文中にも「中角力二而評判不宜、見物少く候よし」と、力士の顔触れが弱く評判が悪くて見物客が少ない様子が語られており、実際に詰方日記にはこの八月六日しか相撲の話題が見られない。しかもこの記事内容では大岡が実際に足を運んだかどうかは不明瞭である。大岡自身があまり魅力を感じていなかったであろう。

この折の相撲については永瀬の嘉永三年『公用私用日記』八月六日、九日、十五日に記事があり、この時期が雨天に見舞われて日程が順調に消化しなかった様子が伺える。以下は永瀬の日記である。

- ・ 八月六日
- 今日相撲出役番有之候処、雨二付日送り申出候事。
- ・ 八月九日
- 一、八ツ時頃天満砂原屋敷へ勧進相撲出役致ス。雨天二付、七ツ時過角力相止候事。

・ 八月十五日
- 一、昼後天満砂原屋敷へ相撲へ出役。倅・物書者勸兵衛召連候事。

事。

やはり『史料集成江戸時代相撲名鑑（上）』によれば、この折の相撲は七月吉日より天満砂原屋敷で晴天十日という予定の勧進相撲であったので、初日が当初の予定よりずれこんで八月一日から始まったということであろう。これら二件の勧進相撲にかかわる記事も、その

時々の、主要な相撲開催地を反映したものである。

むすびにかえて

以上、詰方日記に見られる芸能関係の記事を取り上げ、考察を加えた。近世末期の諸芸能が、どのように享受されていたか的一端が、一人の蔵屋敷の武士を通じて明らかになったのではないだろうか。その中で、現在はともすれば研究分野の細分化のために忘却されがちであるが、当時の武士も、能楽を中心としつつも芝居から見世物にいたるまで、多彩な芸能を享受していたことが改めて認識できたかと思う。また、もうひとつの特徴として、それらの見物は接待という饗応とも強く結びついていたことが伺えた。この点も、現在の芸能史研究においては、ともすれば見過ごされがちな部分であるが、当時の芸能享受の一側面として留意しておくべきであろう。

- (1) 拙稿「大坂の惣年寄記録にみる能記事―公私における能のかかわり―」(大阪大学演劇学研究室『演劇学論叢』第五号)。ここで主な考察対象にしているのも、大阪商業大学商業史博物館蔵の文書である。
- (2) 小林健二氏編著『沼名前神社神事能の研究』(和泉書院、一九九五年)による。
- (3) 『浮世見聞集』については筆者は不詳であるが、幕末大坂の諸事項を書き留めた見聞記で、能や歌舞伎の番組も一部分が写されて控えられている。
- (4) 河作は宮本又次氏「大阪の蔵屋敷と蔵役人」(『大阪の研究』第三

巻)では「南」の一流の茶屋として挙げられている。

(5) 伊原敏郎編『歌舞伎年表』はこの公演を正月十八日からとするが、典拠は不明。翌年正月の役者評判記からは確認できなかった。

(6) 『近來年代記』には弘化年間に大坂で樋口弥多(大)丸、橘美根丸の一座が興行した記録が見えるが、多田丸については未詳。

(7) 大阪府立中之島図書館にこの興行番付が所蔵されており、確認済。

付記

史料の閲覧に際しては大阪商業史博物館をはじめ、阪急学園池田文庫、大阪府立中之島図書館のご厚意を得た。また、小松原家の参考文献は天野文雄先生、『大坂名所一覽記』は内海寧子氏よりご教示いただいた(なお、この史料については山崎勝昭氏の私家版による翻刻もある)。末尾ながら記して深謝します。